

# 監訳の序

関節痛をもつ患者さんが65歳以上高齢者の2人に1人でみられるという国勢調査 (the national health and nutrition examination survey : NHANES) の結果が米国の CDC (center for disease control and prevention, 米国疾病管理予防センター) から発表されました。さらなる高齢化問題を抱える日本では今後“関節痛”を訴える患者さんに外来で遭遇することは必須で、現在でも実際に多数診療しておられると思います。プライマリケア医の方の中には、関節痛患者さんを診たとき、とっさに“整形外科の先生に聞いてみよう”なんて思っている方はいないでしょうか。本書を読んでぜひプライマリケア医でもできる筋骨格疾患の概要、治療法を学んでいただきたいと思います。

私がリウマチ膠原病の専門医研修 (フェローシップ) を行った米国では、筋骨格注射・関節穿刺はわれわれ内科医の役目でした。私は、日本で筋骨格注射・関節穿刺の指導をほとんど受けたことがなかったので、現場ですぐに役立つ教科書はないか探し続け、たどりついたのがこの名著でした。なんと著者の2人は理学療法士で、もうひとり整形外科の経験をもちプライマリケアにも精通した内科医でした。本書のすばらしさは、数ページめくっていただければ一目瞭然で、写真をふんだんに使って穿刺部位が非常にわかりやすく、かゆいところに手が届く臨床のコツを示してくれています。さらに、筋骨格注射・関節穿刺の合併症である動脈損傷や神経損傷を起こしうる部位についても細かく記載してあります。また、各部位別の疾患につき簡潔にかつ長年の経験に基づいた解説を行っており、筋骨格系の主訴に対するアプローチ法のコツを本書を通して習得することができるのです。ただ、すべて暗記することはできないので本書を自室の机の片隅に忍ばせ、筋骨格注射・関節穿刺の際には必ず1～2分かけて該当する項に目を通し確認すると大きな自信にもつながります。一点本書に付け加えるとすれば、欧米人と比べ体格の小さい日本の高齢者では本書で示すステロイドの用量が若干多いと考えられ、記載量の4分の3あるいは2分の1の用量を使用しても十分な効果が得られることが多いと感じています。

出版にあたっては、多大な労力を傾けていただいた翻訳者の萩野昇先生と山本万希子先生、羊土社の北本陽介氏に厚く御礼を申し上げます。

最後に、本書が関節痛患者の診療にあたる整形外科医、リウマチ膠原病内科医の実用書となるばかりでなく、プライマリケア医、研修医にとっても必須の1冊になると確信しています。

2007年12月吉日

亀田総合病院リウマチ膠原病内科医長  
米国内科専門医 米国リウマチ膠原病科専門医

岸本 暢将 M.D, Ph.D